

樗流俳句選抄（夏季雜詠）

選者 今津大天 先生

佳作

衣替え髪摩かせてペタル踏む	長尾伎与子
農婦り端居の方と長話	丹羽三七九
開け放ち風の遊べる夏座敷	多和田瑠璃
開け広げ大の字で寝る夏座敷	青木凡舟
涼み台樂しや孫と負け将棋	二村秀香
蕩蕩と木曾は眩しく夏に入る	兼氏翠月
鞆背に草笛吹いて下校道	柴田小舟
青嵐金華の城を吹き上げる	井戸幸女
終戦日あの玉音が忘れぬ	波多野寿扇
夏休み子等は伸び伸び飛び回る	龜山文月
夏草の路傍に笑みし道祖神	龜山則天
網を持ち神社の森に夏帽子	龜山優花
過疎なれど猫の額の草を刈る	額額久峰
独り居を燕親子に励まされ	寺田登仙
大雨に育ち盛りの稲田守る	後藤松月
羅の清々しきや若き棋士	早津郁男
山城が見下ろす川面鵜飼舟	龜山秀月

（地位）

竿担ぎ川から上がる日焼け顔 畑佐樂人
へ評へ 鮎釣りの人であろうか。釣りが一段落、川から竿を担いで上がってきたのだ。日焼け、精悍な顔が太陽に照らされきくと黒光りして、ろう。作者は川岸で釣り人の魚籠の中の釣果をかめたのではないか。まさに夏そのものの句である。

（天位）

禅僧の読経に合わせ蝉時雨 天野桂花
へ評へ 禅寺のお堂の中からお経を唱える声が聞こえてくる。他方、庭の方では蝉の騒々しき声がする。「読経に合わせ」をどう取るか。者は、単に両方が同時と言うだけでなく、悟り世界と大自然の蝉の声の響き合いにこの世界（実を感じ取ったのではないか。

七 客

清流の河鹿相手に歌う我	河合 都
祖母と手を繋ぎし記憶遠花火	大久保大凹
百日紅影さす寺に一揆の碑	岩田華泉
木枕の角材匂う三尺寝	村瀬昇竜
昼寝子の頬に畳の跡残る	永縄一紅
老のみを残して過疎の春深し	御田村光女
夏休み工作父も手伝いぬ	林 巴城

三 光

（人位）

無人駅開くドアより青田嵐 岩間芳泉
へ評へ ローカル線の無人駅で列車が止まり、と自動ドアが開く。しかし、自分の居る車両に誰も乗ってくる気配がない。その代わりさう、田を吹き渡りて来た心地よい風が吹き込んで、という句である。寂寥感と同時に清々しさを感ずる。

選者詠

心配のないが心配聖五月

大天

樗流俳句次号応募要領

- 一、秋季雜詠（ひとり三句）
- 一、締切り令和三年七月末日厳守
- 一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 一、所属社名・雅号名記
- 一、樗流会員変名不可
- 一、投句所 〒504-0934
- 一、各務原市大野町一丁目一二〇番地
- 一、岩田華泉宛
- 一、電〇五八・三八二・七七二五

樗流俳句選抄本（春季雜詠）

梅村五月

卯

佳作

しみじみと孫の入試で知る速さ 高橋照笑
静けさやみなうたた寝の置炬燵 御田村光女
伊那街道車窓にバミと桃の花 畑佐衆人
愛くるし孫と雛壇祝い酒 二村秀香
蓮華田を車で廻りて木曾の旅 河村花玉
酒仕込み終へ古里へ杜氏帰る 服部利水
露味噌の香り仄かに里の味 井戸幸女
懐かしや肩車寄せ会ひた桜道 山内澄香
久し振り地下足袋履いて畑を打 柴田小舟
地桜の開花を告げる紙面満つ 後藤松月
散歩道はや蒲公英を見つけたり 長尾伎与子
参道の花を楽しみ宴の輪 国枝紫陽
ひとせの辿るは早し初つばめ 永縄一紅
爛漫の春は津軽の海を越す 青木凡舟
春光や老いに喜び運びくる 波多野妙生
お花見の家族が群れる長良川 寺田登仙
髪切りて春風まとふバスの旅 兼氏佐代子

＜地位＞

パンジーにスマホを向ける古い 岩田華泉
＜評＞ 本年は温かいのでパンジーがいっせいに咲き揃った。
老人の皆さんもスマホを駆使されるようになつた。
歓声を挙げているのは、「老いの群れ」と断定された点が景となりつつたわいてくる。
＜天位＞
わらび狩り携帯電話で話をり 林 巴城
＜評＞ 便利な世の中になつた。
わらび狩りに携帯電話を使い教え合っているのだ。
「おーい、そちは沢山採れるか」「あんな、白い岩があるあたりにいっばい生えているのでこちらへ来いよ」と位置を知らせ合っているのだ。
わらび狩りをするのに携帯電話を使用した例をはじめて知つた。
山盛りになつたわらびの束を見せ合っている光景が浮かんでくる。

振りあげし筍産毛の光けり 岩間芳子
山裾に田園風景雉の声 畑佐俊作
散歩道イヌフグリ咲き杖遊ぶ 柴田文花

七客

花吹雪格子戸すかし紙帳場 額額久峰
春うらら東坡の句碑の細き文字 加藤晴月
合羽着て受粉作業の梨畑 村瀬昇竜
人口の雪のグレンデ客疎ら 畑佐美泉
錆鎌を研ぐ小流れの温みけり 吉田亀笑
墨太きうぐひす餅と菓子処 早津郁夫
ちぐはぐな難聴会話山笑ふ 波多野寿扇

三光

＜人位＞

席変えてホームの夕餉二月尽 藤井 修
＜評＞ 追記に依れば一昨年妻を亡くされ娘さんの住んでおられる瀬戸市のホームに入所されていると、ホームでの席替えがあつて楽しい夕餉が訪れたのだ。
席を替えたことと時の過ぎてゆく早さがつたわいてくる。

選者詠

兄よりも弟が勢ふ追儼かな 五月

注意事項

樗流俳句も良吟がつぎつぎと投句されて来て歓びにたえない。
投句の中には「あ、この句どこかで拝見したぞ」とか「類句に近いな」と言つた句がありました。
生活の中に生まれたあくまでも自作の句を投句して下さい。

樗流俳句次号応募要領

- 一、夏季雜詠（ひとり三句）
- 一、✓切
- 一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 一、所属社名、雅号名記
- （樗流会員変名不可）
- 一、投句所 〒504-0934
各務原市大野町1-120
岩田数美
電（058）242-2254番